

近年のペルシャ湾岸地域の研究動向

宗墓 秀明

Recent Archaeological Studies in the Gulf

Hideaki SHUDAI

キーワード：ペルシャ湾岸、海上交易、ウナム・アン＝ナル文化、ディルムン、エラム

Key-words: Persian Gulf, Maritime-trade, Umm an-Nar, Dilmun, Elam

湾岸地域の考古学調査は、1950年頃より本格化した。当初の調査関心は、洪水伝説に語られた楽園の地ディルムン(Dilmun)を求めるメソポタミア研究の延長線上にあり、その後もウバイド文化の広域展開とメソポタミア側から見た鉱物交易の研究を主眼としたものであった。それが、1953年から長期にわたって調査が続けられているバハレーン(Bahrain)での城塞遺跡調査の成果やアラブ首長国連邦でのウナム・アン＝ナル(Umm an-Nar)文化遺跡の発見以降、湾岸のアラビア半島側地域における文化展開の独自性と同時にメソポタミア地域にとどまらず、東方のインダス文明地域をも含めたアラビア海世界と関連した文明研究へと大きく進展した。こうした中、1986年に刊行された*Bahrain through the Ages -the Archaeology*は、バハレーンを中心としながらもヒーリ(Hili)やラッ・スル＝ハマラー(Ra's al-Hamara)などオマーンの遺跡も積極的に取り上げながら、ウバイド土器の出土分布、湾岸式スタンプ印章、クロライト製石製容器を証拠とした海上活動を主要な論点としつつ、湾岸地域やその周辺地域との関係を含めた広汎な地域からの視点を通じた湾岸先史文化を論じた論文集として、湾岸考古学研究の歴史と現状、そして展望を示した。(Khalifa (AL) Sh. Haya Ali et al. 1986)それは湾岸地域の考古学研究の80年代までの到達点ととらえられるものである。その後の湾岸地域研究は、この論文集の示した到達点とそこに示された今後に向けた問題点を土台として活発に行われたが、ことにこの10年に限れば、新たな資料の出土と研究の展開をやや欠いている。よって、以下では*Bahrain through the Ages -the Archaeology*に示された問題点とそれ以降の展開として、研究動向を見ていくこととする。また、報告者の力量から、インダス流域文化研究の視点に偏重した感の否めないことをご容赦願いたい。

湾岸地域各国の考古局も発掘調査・研究を行っているが、年報や報告書の刊行は遅れ気味で、*Atlatl (Journal of*

Saudi Arabian. Archaeology)を定期的に刊行しているサウディ・アラビアを除いた地域での調査成果は、外国隊の報告書やシンポジウム記録、それに論文集で公表されることがほとんどである。報告書では、バハレーンで長らく行われていたデンマーク隊とイギリス隊の調査がようやく刊行された。

1955年のP. J. グロブ(Glob)とG. ビビー(Bibby)から始まるデンマーク隊のカラー・トゥル＝バハレーン(バハレーン砦 Qalā' at al-Bahrain)の発掘は、前3千年紀末からイスラーム期までの長期におよぶ遺構と遺物を発見した。このうち、前2000年前後から前2千年期後半の2時期の市壁北部周辺とイスラーム期の城塞に関する大部な報告書が1994年に刊行されたが(Højlund and Andersen 1994)、他の調査区の報告が待たれていた。1997年になって市壁内部の調査成果が公表された。*Qalā'at al-Bahrain-Volume 2: The Central Monumental Buildings*である(Højlund et al. 1997)。これによって、バハレーンの前3千年紀後半から2千年紀の基準資料と考えられてきた土器分類と変遷に関する土台が提示され、編年論議の土俵が出来上がった。また、2004年にはやはり1954～61年にかけてビビーらが調査したパールパール神殿の報告書もようやく刊行された(Andersen et al. 2004)。パールパール神殿は、ペルシャ湾航海における飲料水供給地としてのバハレーンを特徴づける泉、湧水遺構を中心施設としたもので、泉や水はメソポタミア神話のエンキとのかかわりが指摘され、報告者はこうした泉遺構について詳しく論じている。

すでに調査終了後、半世紀を経たものの湾岸考古学の先駆けとなったパールパール神殿を含めたデンマーク隊による発掘調査の報告は、この地域の今後の調査研究において基本資料となった。はやくも、カラー・トゥル＝バハレーンの成果をもとにM.ケルヴラン(Kervran)らは、*Qalā' at al-Bahrain: a Trading and Military Outpost, 3rd Millennium B.C.-17th Century A.D.*を2006年に刊行している

(Kervran, Hiebert and Rougelle 2006)。また、同遺跡の出土資料をもとにイスラーム期の出土資料を要領良くまとめた Islamic Remains at Bahrain を K. フリフェルト (Frifelt) と P. バングスガード (Bangsgaard)、それに V. ポーター (Porter) が 2002 年に刊行している (Frifelt et al. 2002)。そこでは、土器、金属器、石製品、ガラス製品、コインの他に獣骨も取り上げられて、イスラーム期の湾岸地域の生活と交易の姿を追う格好の資料集となっている。

イギリス隊の調査では集落遺跡であるサール (Soar) の報告書が 1997 年に出版された (Killick and Moon 1997)。ここでは集落内に幾度も立て替えられた宗教施設があり、その壁面に三日月形に窪んだ奉献台が設置されていた。日本隊が 1990 年代に調査したアイン・ウナム・エツ＝スジュール (Ain Umm es-Sujur) 遺跡でも上方の窪んだ奉献台と思われる石灰岩製石製品が井戸跡から出土している。先のパールパール神殿の泉遺構とも合わせて、バハレーンにおける水信仰は、こうした奉献台状遺物・遺構の解釈が重要な視点となってきている。他方、上方が窪んだ矩形の文様は、イラン高原の前 3 千年紀から 2 千年紀に製作された凍石製容器の外側面に神殿あるいは建造物の入り口としてしばしば表されていることも注意が必要である。なお、サール遺跡の報告書には大量のスタンプ印章とその印影が豊富な挿図と図版で掲載されていることも見逃してはならないだろう。

こうした長年にわたる調査とその成果が公表されるなか、2000 年にはヨーロッパ各国でバハレーン考古学展示会が行われた。7 月から 9 月に行われたロンドンでは、Traces of Paradise: The Archaeology of Bahrain 2500 B. C. -300 A. D. と題して行われた。展示会の名称は各国で異なるが、その図録はコンパクトで良くまとまっていて好評のようだ (Bahrain National Museum 2000)。

バハレーンを離れて、アラビア半島側ではオマーンとアラブ首長国連邦における調査が活発である。オマーンでは、1977 年からハイデルベルグ大学を中心としたドイツ隊が 98 年まで調査を継続し、ウナム・アン＝ナール期の銅鋳床と製錬遺跡、それに前 2 千年紀のワディ・スーク (Wadi Suq) 期の墓地などを発見・調査している。また、当初はパルティア、ヘレニズム、さらにはササン朝イラン系住民の文化と想定されていたサマド文化がその墓壇の調査から中世初頭にまで下るものと想定されている。他方、文化遺産省との合同で、いわゆる円筒墓の緊急調査も行なわれた (<http://omanarch.esmantweb.com/>)。より時間をさかのぼった沿岸地域先土器時代遺跡 RH 5 および 6 の調査を 1985 年からイタリア隊が行い、細石刃や槍先を欠いた石器組成の漁撈中心生活を描き出している (Costanti-

ni et al. 1985)。沿岸指向の生活が後の海上交易活動の基盤となっていたことは確かである。90 年代には前 4～5 千年紀に帰属する 100 以上の遺跡をやはり沿岸に確認しているが、季節居住遺跡が多く、後の交易拠点にはなっていない (Biagi, and Maggi 1990)。そんな中、イタリア隊はラースウ・ル＝ジュネイズ (Ra's al-Junayz) 遺跡の II 期 (前 2500-2200 年) からインダス方面への輸出用アラビア海産の貝殻 (Charpentier, 1994) とともに瀝青の塊が、さらに葦の圧痕が残る板状の瀝青が発見されている。発見者はこれを瀝青で防水された葦舟の痕跡ではないかとしている (Cleuziou, and Tosi 1994)。

また、オマーンでは、デンマーク隊が発掘したウナム・アン＝ナールの調査以後、Hili 8 が墳墓以外の生活遺跡として、また銅の産出・交易地として湾岸地域を越えてメソポタミアからインダスに広がるアラビア海周辺地域との関連で当該地域をとらえなければならないことを強く情報提供してきた。加えて、半島西岸に面するテル・アブラク (Tell Abraq) を D. T. ポッツ (Potts) が精力的に調査し、近年の注目遺跡となっている。1989 年から始まったテル・アブラクの調査では、前 3 千年紀後半から 2 千年紀初頭までのとぎれのない文化層に鉄器時代と後 1 千年紀前半の文化層を乗せている。注目されるのは、前 3 千年紀末から 2 千年紀初頭にかけての時期に石材と泥煉瓦で作られた直径 40 m を超える周壁が現れる。この遺構の周辺から出土した南アジア産の縞チャートのハラッパー式分銅、雲母塗布赤色土器、象牙製品などがインダス文明との強いつながりを示していることである (Potts 1999; 1994, Vosmer, 1997)。この周壁と関連があると思われる遺構が前 3 千年紀半ばのオマーン半島内陸部バート (Bat) 遺跡で発見されている (図 1)。遺構は、石灰岩の切石を積んだ直径 20 m の円形で 5 m の高さが遺存している。タワーと呼ばれる遺構の内部は矩形に仕切られて、その中央に直径 1 m の井戸が配置されている。矩形に仕切る壁は井戸を囲む基壇の土台であろうと考えられ、基壇へと続く傾斜路が外側に設けられている。このタワーを発掘者は、灌漑水路に井戸の水を供給するための施設で、基壇は水位を上昇させるためのものとしている (Frifelt 1986)。テル・アブラクの周壁もこれと同様の井戸タワーである可能性が考えられる。

アラブ首長国連邦では、ウナム・アン＝ナール型墓がアル・アイン (Al Ain) 周辺で盛んに発見・調査されてきたが、80 年代末にはオマーンのジャベル・アカダル (Jebel Akhdar) 丘陵麓のイブリ (Ibri) オアシス周辺にもウナム・アン＝ナール型墓が確認されている (Weisgerber, and Yule 1989)。また、90 年頃には海岸から 3km ほどのラッ＝スル＝ハイマーのシマル (Shimal) 遺跡に前 2 千年紀の集積墓群も発見されている (Schutkowski, 1990)。

そして、ラッ・スル＝ハイマーで調査を続けていた B. フォクトは、遺跡分布調査の過程で沿岸域住民の貝食指向の強さの指摘とともに、ウバイド式土器がオマーン半島先端の地域にまで持ち込まれていたことを指摘している (Vogt, 1994)。しかし、J. オーツ (Oates) は早くも 1986 にオマーン以南には発見されていない湾岸ウバイドとメソポタミア・ウバイドとの編年と交渉について、エリドゥ (Eridu) の報告を基に論じている (Oates, 1986)。それによれば、湾岸のウバイド土器はシュメールで作られたもので、シュメールと湾岸との関係は交易、漁撈、その他などを挙げながらも不明としたが、陸路上にウバイド文化遺物が発見されていないことを強調している。湾岸地域の外的交渉が沿岸部において顕著であって、とくにオマーン半島における外向きと内的接触システムの二重構造が早くから内包していたことを示唆している。こうした外的・内的交渉システムを統合した文化把握が今後の課題であろう。

また、近年のサウディ・アラビアでは、岩刻画が研究の一つの焦点となっているが、国内で刊行されている『インド考古研究』でもその概要を知ることができる (Khan, 2005)。

このようにペルシャ湾岸地域の考古学研究ではテル・アブラクの調査が端的に示すように、湾岸地域に限定してはその展開の力強さを理解できない。こうした状況はどの地域の研究においても程度の差こそあれ認識されているが、こと湾岸地域ではそれがより重要となっている。H. E. W. クロフォード (Crawford) による *Dilmun and its Gulf Neighbours* は、前 4500 から 1500 年頃にかけてのペルシャ湾岸地域を扱うなかで、当該地域の都市構造、中枢化、文明化、そしてその衰退をオマーン半島地域のみならずメソポタミアとインダス流域地域との交易活動とどのように関わっていたかを視点として論じている (Crawford 1998)。そして、ポッツによる *The Archaeology of Elam and Transformation of an Ancient Iranian* は、外からペルシャ湾岸地域と周辺地域との関係を描き出そうとしている (Potts 1996 b)。前 2600 年頃から紀元前後にかけて南西イラン高原に現れたエラムの起源とその展開を多くの資料を提示して論じながらも、イランにとどまらずメソポタミア地域はもちろん湾岸世界やインダス流域も視野に入れた先史から古代の西アジアを論じている。さらに、ポッツは *The Arabian Gulf in Antiquity* の第 1 巻 *from Prehistory to the Fall of the Achaemenid Empire* と第 2 巻 *Alexander the Great to the coming of Islam* をしてのペルシャ湾岸地域の先史から古代の歴史を考古学、金石文、文献を渉猟して西アジア世界の一面に湾岸を位置づけようとしている (Potts 1991 a: 1991 b)。

ペルシャ湾岸地域を西アジアの歴史を動的に把握する

ために重要な地域と位置づける研究動向の中、考古学、金石文、民族学、言語学、歴史学、美術におよぶ広範な研究者が集い、先史から近代までの湾岸地域を討議する研究会議が隔年開催され、*Proceedings of Seminar for Arabian Studies* が刊行され続けている。また、Brepols 出版では *Abiel: New Research on Arabian Peninsula* と題したシリーズ本を刊行している。ここには、アラブ首長国連邦の発掘報告が掲載されるとともに、*Arabia and Her Neighbors: Essays on Prehistoric and Historical Developments* などの単行本としての体裁をとることもある。研究会報告の他に、定期刊物にはポッツが編集を行っている *Arabian Archaeology and Epigraphy* が執筆時点で Vol. 18 を数えている。年 2 回の刊行も順調で湾岸にとどまらずにクウェートからサウディ・アラビア、イエメンまでのアラビア半島全体をカバーしながら先史からイスラーム時代を周辺諸地域を含めて扱っている。

以上のように地域間相互の対外交渉を抜きにしては考えられないペルシャ湾岸地域の考古学は、国内事情から一次停滞していたイラン南部の調査が 1980 年代末から、またパキスタン南西部でも 1990 年代以降には積極的な調査が行われるようになったことで、周辺地域の考古学成果からも照射されて、これから一層の展開が期待されていた。しかし、2001 年以降の情勢はそうした周辺地域での調査を再び中断せざるを得ない状況に追い込んでしまったことは非常に残念である。

本文中書名掲載文献 (掲載順)

- Andersen, H. H., F. Højlund et al. (eds.) 2004 *The Barbar Temples*, 2 Vols. Oakville. David Brown Book Company.
- Bahrain National Museum 2000 *Traces of Paradise: The Archaeology of Bahrain 2500 B.C.-300A.D.* London.
- Biagi, P., R. Maggi and R. Nisbet 1989 Excavations at the Aceramic Coastal Settlement of RH5 (Muscat, Sultanate of Oman). In K. Frifelt and P. Sørensen (eds.), *South Asian Archaeology 1985*: 1-8. London. Curzon Press.
- Biagi, P. and R. Maggi 1990 Archaeological Surveys along the Oman Coast: Preliminary Results of Five Years of Research (1983-87). In M. Taddei and P. Callieri (eds.), *South Asian Archaeology 1987*: 543-553. Rome. IsMEO.
- Charpentier, V. 1994 A specialized production at regional scale in Bronze Age Arabia: shell rings from Ra's al-Junayz area (Sultanate of Oman). In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*: I: 157-170. Helsinki. Suomalainen Tiedeakatemia.
- Crawford, H. E. W. 1998 *Dilmun and its Gulf Neighbors*. Cambridge Univ. Press.
- Frifelt, K., P. Bangsgaard and V. Porter 2002 *Islamic Remains at Bahrain*. Aarhus. Jutland Archaeological Society Publications, 37.
- Cleuziou, S. and B. Vogt 1985 Tomb A at Hili North (UAE) and Its Material Connection to Southeast Iran and the Greater Indus Valley. In J. Schotsmans and M. Taddei (eds.), *South Asian Archaeology 1983*: 249-277. Naples, Instituto Universitario Orientale.

- Cleuziou, S. and M. Tosi 1994 Black boats of Magan: Some Thoughts on Bronze Age water transport in Oman and beyond from the Impressed Bitumen Slabs of Ra's al-Junayz. In J. Schotsmans and M. Taddei (eds.), *South Asian Archaeology 1993: II*: 745-761. Naples, Instituto Universitario Orientale.
- Costantini, L., Scerrato, U. et al. 1985 Archaeological Activities in the Yemen Arab Republic, 1985. *East and West New Series* 35-4: 337-395.
- de Cardi, B. 1989 Harappan Finds from Tomb 6 at Shimal, Ras Al-Khaimah, United Arab Emirates. In K. Frifelt and P. Sørensen (eds.), *South Asian Archaeology 1985*: 9-13. London. Curzon Press.
- Frifelt, K. 1989 Third Millennium Irrigation and Oasis Culture in Oman. In J. M. Kenoyer (ed.), *Old Problems and New Perspectives in the Archaeology of South Asia*. Wisconsin Archaeological Report, Vol.2: 105-113. Madison. Wisconsin Univ.
- Højlund, F. and, H. H. Andersen et al. (eds.) 1994 Qala'at al-Bahrain-Volume 1: The Northern City; Wall and the Isamic Fortress. Aarhus. Jutland Archaeological Society Publications. 30-1.
- Højlund, F., H. H. Andersen et al. (eds.) 1997 *Qala'at al-Bahrain-Volume 2: The Central Monumental Buildings*. Aarhus. Jutland Archaeological Society Publications. 30-2.
- Kabawi, Abdul-Rahman 1989 Some Basic Element of Rock Art in Saudi Arabia. In K. Frifelt and P. Sørensen (eds.), *South Asian Archaeology 1985*: 55-59. London. Curzon Press.
- Kervran, M., F. Hiebert and A. Rougelle (eds.) 2006 Qala'at al-Bahrain: a Trading and Military Outpost, 3rd Millennium B. C. -17th Century A. D. Turnhout Belgium. Brepols.
- Khalifa (Al) Sh.Haya Ali et al. (eds.) 1986 *Bahrain through the Ages -the Archaeology*. London. KPI.
- Khan, M. 2005 Jubba-the most Prominent Rock Art Site of Saudi Arabia. *INDO-KOKO-KENKYU* 26: 63-72.
- Killick, R. and J. Moon 1997 *The Dilmun Temple at Saar: Bahrain and Its Archaeological Inheritance (Saar Excavation Reports / London-Bahrain Archaeological Expedition)*. London. Kegan Paul International.
- Nisbet, Renato 1985 Excavations at the RH 5 and RH 6 Sites, Qurm, Winter 1985-86. *East and West New Series* 35-4: 407-417.
- Oates, J. 1986 The Gulf in Prehistory. In Khalifa (Al) Sh.Haya Ali et al. (ed.) *Bahrain through the Ages. the Archaeology*, 79-86. London. KPI.
- Phillips, C. S. et al. (eds.) 1998 *Arabia and Her Neighbors: Essays on Pre-historic and Historical Developments* (Essays presented in Honour of Beatrice de Cardi. Turnhout Belgium. Brepols.
- Potts, D. T. 1991 a *The Arabian Gulf in Antiquity: from Prehistory to the Fall of the Achaemenid Empire*. Gloucestershire. Clarendon Press.
- Potts, D.T. 1991 b *The Arabian Gulf in Antiquity: Alexander the Great to the coming of Islam*. Gloucestershire. Clarendon Press.
- Potts, D. T. 1994 South and Central Asian Elements at Tell Abraq (Emirate of Umm al-Qaiwain, United Arab Emirates), c.2200BC-AD400. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993(II)*: 615-628. Helsinki. Suomolainen Tiedeakatemia.
- Potts, D. T. 1999 a *Ancient Magan: The Secrets of Tell Abraq*. London. Trident Press.
- Potts, D. T. 1999 b *The Archaeology of Elam and Transformation of an Ancient Iranian State*. Cambridge World Archaeology.
- Schutkowski, H. 1990 Possibilities of Anthropological Interpretation in Disturbed Collective Burials. In M. Taddei and P. Callieri (eds.), *South Asian Archaeology 1987*: 555-568. Rome. IsMEO.
- Vogt, B. 1994 In search for Coastal Sites in Pre-Historic Makkah: mid-Holocene "shell-eaters" in the Coastal Desert of Ras al-Khaimah, U.A.E. In J. M. Kenoyer (ed.), *From Sumer to Meluhha: Contributions to the Archaeology of South and West Asia in Memory of George F. Dales*: 113-128. Madison. Wisconsin Univ.
- Vosmer, Tom 1997 The Durable Dhow. *Archaeology* 50-3: 50.
- Weisgerber, G. and P. Yule 1989 The First Metal Hoard in Oman. In K. Frifelt and P. Sørensen (eds.), *South Asian Archaeology 1985*: 60-61. London. Curzon Press

湾岸地域考古学的研究の今後の方向性を示唆する主要な成果をここに紹介したが、この他の重要な文献、調査成果を遺漏していると思われる。また、歴史時代以降、とくにイスラーム時代については全く触れることができなかった。筆者の勉強不足である。おおかたのご教示をいただければ幸いです。

宗臺 秀明
鶴見大学文学部
Hideaki SHUDAI
Tsurumi University